卒業論文

不妊とともに生きるということ

――女性不妊経験者のライフヒストリーから――

2012 年度入学

九州大学 文学部人文学科人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2016 年 1 月　提出

要　約

本論文は、不妊経験者の不妊治療過程における意思決定のあり方を検討することを通じて、子産み規範に翻弄される存在としてではなく、そういった諸規範に対して自ら再解釈を行い､価値転換を実践しながら生活する不妊経験者の可能性を論じることを目的とする。

はじめに、日本における不妊／不妊治療の現状として、諸々の統計データを示したうえで、不妊治療者らがどのような治療を経験するのか、そして行政や自助グループなどからどのような支援を得ているのかをまとめた。また第三者の関わる生殖補助医療に関する規制がどのようになされているのかについてもこの部分でまとめている。さらにこういった状況を踏まえて、社会学においては不妊／不妊治療がどのように語られてきたかということを、ジェンダー、家族、医療という３つの視点から整理した結果、(1) 既存の研究は不妊であることにより生じる種々の摩擦を取り扱うものが多く、(2) それらの摩擦から影響を受ける受身的人間として不妊経験者が捉えられがちだということがみられた。

次に、谷富夫の言説を参照しながら、(1) 時間的パースペクティブを有することと (2) 全体的把握が可能であること、さらに (3) 主観的意味づけの把握が可能であることの３つの理由から、不妊経験を分析するにあたっての有効な手法が、ライフヒストリー分析であることまとめた。また本論文における不妊概念を「子が得られないということに何らかの影響を受けたと主観的に感じている状態」と定義したうえで、意思決定プロセスを「意思決定状況との直面」､「意思決定内容の検討」､「意思決定の実施」の３つに分節化しそれぞれを分析焦点とすることを示した。

つづいて、調査対象の選定方法と選定理由を調査概要にあわせてまとめた。調査対象はアクセス難度、先行研究との比較のしやすさの面、そして語りの安定性の面から１人の女性に決定された。調査結果については、不妊経験を時系列に沿って整理した。

分析においては、調査対象の語りを上述した分析の焦点に基づいて整理した。また分析の焦点と併せて不妊の受容過程についても検討した。その結果治療上の意思決定プロセスと不妊の受容プロセスとが、かならずしも対応関係にあるわけではないということがみられた。また R.Merton の適応類型を大枠として援用しながら、調査対象の不妊経験をそれらの類型間の移動として整理したところ、調査対象が子産み規範に対して同調的だった状態から逃避主義の段階を経て反抗的適応を示すに至ったということがみられた。

最後に、語りのなかの随所に現れた子産み規範の存在や、それに対して別の価値を創造することの可能性を示した。またその一方で、不妊経験者の経験を主体的なものとして捉えることの弊害や、不妊／不妊治療における言説における男性の視点の必要性、そして本稿の一般性の欠如などについても付言して本論文の結びにかえた。

目　次

1　本論文の背景と目的 …… 1
1.1　関心の所在 …… 1
1.2　不妊および不妊治療をとりまく現状 …… 1
1.2.1　不妊と不妊治療をめぐる動向
1.2.2　一般不妊治療と生殖補助医療、そしてその治療の種類
1.2.3　第三者の関わる生殖補助医療とその規制
1.2.4　不妊治療とその公的補助
1.2.5　不妊治療とその支援活動
1.3　不妊と不妊治療についての先行研究 …… 6
1.3.1　ジェンダーの視点からの研究
1.3.2　家族の視点からの研究
1.3.3　医療の視点からの研究
1.3.4　不妊経験者を主体的人間として捉えるということ
1.4　小括 …… 8
2　本論文における分析の方法論と分析の焦点 …… 9
2.1　本論文における方法論 …… 9
2.2　先行研究における不妊経験者の語りの扱われ方 …… 10
2.3　「不妊である」とはどういうことか …… 11
2.4　分析の焦点 …… 13
2.4.1　意思決定状況との直面
2.4.2　意思決定内容の検討
2.4.3　意思決定の実施
2.5　小括 …… 14
3　調査の概要と対象について …… 15
3.1　調査のスケジュール …… 15
3.2　調査対象について …… 15
3.2.1　調査対象 A 氏について
3.2.2　調査対象の選定理由

3.3　調査協力団体　…… 16
4　A 氏のライフヒストリー　…… 18
4.1　認知前　…… 19
4.2　認知後・受診前　…… 20
4.3　受診後・治療前　…… 21
4.4　治療中　…… 22
4.4.1　仕事の合間での治療生活
4.4.2　妊娠、そしてその流産にいたるまで
4.4.3　体外受精へのステップアップ
4.4.4　初めての不妊専門クリニック
4.4.5　変化する人間関係の受け取り方
4.4.6　治療仲間との交流と、その両価性
4.4.7　A 氏はなぜ子が欲しかったのか
4.4.8　2 度目の転院
4.4.9　仕事の再開、治療だけの生活からの脱却
4.4.10　沖縄への移動
4.4.11　治療終了へ
4.5　治療終了後　…… 40
4.5.1　治療後の苦悩、自らの存在意義について
4.5.2　第二の人生への歩み
4.5.3　大阪への移動と転機、子のいない人生の受容
4.5.4　受容後の人生
5　A 氏の不妊治療過程における意思決定　…… 45
5.1　受診をする選択　…… 45
5.2　治療をする選択　…… 46
5.3　治療中の選択　…… 46
5.4　治療を止める選択　…… 48
5.5　A 氏の適応様式　…… 49
5.6　小括　…… 51
6　不妊とともに生きるということ　…… 52

6.1　子産み規範の存在 …… 52
6.2　価値転換の実践 …… 53
6.3　主体化の言説における罠 …… 53
6.4　男性不妊経験者への視線 …… 54
6.5　本稿の限界 …… 54
6.6　不妊経験者の多様性に目を向ける …… 55
［注］ …… 57
［文献］ …… 60
［付録］ …… 63